

# ろくべん館だより

## 『猫がつないだ信州と遠州のはなし』

吾輩は猫である。しかしただの猫にあらず。吾輩は赤石岳の向こう側から旅してきた猫である。

『信州猫檀家』という静岡県中川根町(現在の川根本町)に伝わる民話には、こんな猫が登場する。今回はこの猫檀家の話を紹介しよう。

むかし、応仁の乱が終わって、10数年たった明応（1492年から1500年）のころ、上長尾の智満寺の宗芸和尚さんという方が、1匹の猫を飼っておりました。

そのころ、この地方が飢饉にみまわれ、人々の食料がとぼしくなっていましたので、ある日、和尚さんは猫に向かって、

「人間でさえ、食べ物がなくて困っている。本当に気の毒だが、このままではみんなの手前、食べ物をやることもできなくなりそうだ。今のうちに、どこか食べ物のあるところへ行きなさい。」

という、和尚さんの顔をじっと見ていた猫は、うなずいて、

「和尚さん、長い間かわいがっていただいてありがとうございました。この御恩は一生忘れません。いつか必ず恩返しをします。」

それから何年かたったころ、信濃国大河原村（現在の長野県下伊那郡大鹿村）では名主の娘さんが亡くなり、そのお葬式をしておりましたが、その時、突然、空から黒い雲が降りてきて、あれよあれよという間に娘さんの棺をつつみこみ、また空に昇っていきました。

すると、棺の中は不思議なことにからっぽで、娘さんは煙のように消えて無くなり、お葬式は大騒ぎになってしまいました。

その時、どこからともなくあの智満寺にいた猫が現れ、

「娘さんを取り戻すには、遠江国山香庄の河根というところに智満寺というお寺がありますが、そこの和尚さまにお願いするしか方法はありません。この和尚さまは、人並みすぐれて修行をつんだ、たいへん徳の高い情け深いお人で、お願いすれば、必ず娘さんを取り戻していただけます。皆さん、迷っている場合ではありません。」

と、それだけ言うと、その場から立ち去っていきました。

名主さんたちは、すぐに智満寺にきて和尚さんをお願いし、休む間もなく大河原村に案内しました。

和尚さんは無言で祭壇の前に進み、正面に着座すると静かにお経を唱えはじめました。その声は、次第に高まってすみずみまでよく伝わり、すると不安だった人々の気持ちもだんだん安らいできました。

どのくらい時間がたったのでしょうか。ふたたびもとの静けさに戻るように、お経が終わりました。すると、不思議なことに娘さんの亡骸は、もとの姿のまま安らかに棺の中に戻っていたそうです。

そういうことがあって、大河原村の香松寺は、その時から智満寺の末寺になったそうです。

香松寺には『香松寺記』という記録がありますが、それを見ると、かんたんに宗芸和尚さまを『中興の開山』と記してあり、この出来事が文亀元年（1501年）であったということで

す。

この時から、かれこれ500年近くもの長い間、上長尾の智満寺と信州の香松寺との交わりが続いているとのことだ。

実際に、智満寺と香松寺は今でも本寺、末寺の関係にあり、深いつき合いが続いている。香松寺の住職にお聞きしたところ、この話の当時、まだ大河原に寺はなく、宗芸和尚がやって来たおかげで名主の娘もねんごろに葬ることができたという話ではないか。そしてこの宗芸和尚が御所平に結んだ庵が、香松寺のはじまりであったという。ちなみに香松寺の名前は、寺を開くときの支援者となった香坂氏と松平氏に由来すると聞く。

その香松寺を開いた伝浮宗芸(でんぷそうげい)和尚という人は、教えを広めるために川根から秋葉山に通じる街道を歩き、また秋葉山から諏訪へと通じるこの秋葉街道を北上してきたと考えられる。

しかし、なぜ猫なのか？

智満寺の住職はこう説明してくれた。「この寺は昔から猫と縁が深く、今でも10匹くらい猫がいます。今はどこかに仕舞われていますけれど、その昔書院に使われていた板戸には20センチ四方くらいの穴が開いていまして、なぜかと問いましたら、猫が出入りするための穴だったのだそうです。」

穏やかな語り口の住職が、「しょうがないな」と言いながらも、今も門前に捨てられた猫の面倒を見る姿が思い浮かべられる。

この『信州猫檀家』の話を書いた人は、智満寺の檀家の一人の郷土史家だったそうだが、寺の歴史と猫寺の相を呈する様子を合わせて、こんな民話を創作したようだ。

住職を話を聞きながら、赤石岳という高いついたてを隔てた信州と遠州を結ぶ話に、心があたたまる思いがした。